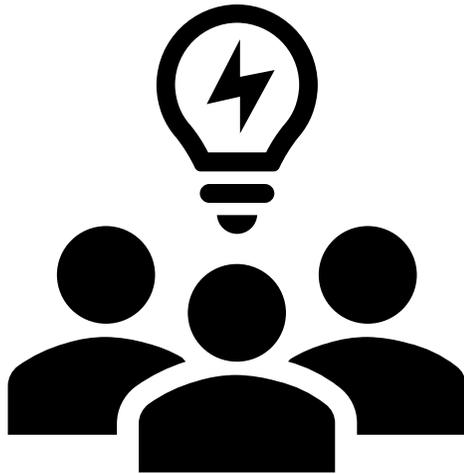


構成員による課題意識の共有



【発表予定者】

青木 一真 氏

遠藤 みゆき 氏

荻野 勉 氏

末吉 弘治 氏

田村 香江 氏

原 和久 氏

渡辺 寿之 氏

* 発表後に質疑・応答を行います。

関係者協議会 課題意識の共有 (DP)

東京都立国際高等学校 DPコーディネーター
青木 一真

0. はじめに（自己紹介）

所属：東京都立国際高等学校（学芸大学附属国際中等教育学校と並び、2015年に国公立で初めてのDP認定校となる、英語DP実施中）

教科：地理歴史（世界史専門）

IBコースの歴史やレギュラーコースの国際関係学などを担当中

1. 課題意識の共有

①人材育成

IB教育は正しい教科指導・評価方法、最終試験など「出口戦略」への対応方法を身につけるのに時間がかかる。

→しかしながら、特に公立校では職員の異動による好実践の断絶が起きてしまう。

→IB教員養成を担う大学との連携

人事的な配置を行う行政との連携

job-a-likeなどを通じたより頻繁なIB教員同士のネットワーク

②学習指導要領との整合

DPの内容をどう扱うか、は日本の学習指導要領の文化と、国際的な文化は必ずしも一致しない。

→しかしながら、文科省の告示（学習指導要領の内容を適切に取り扱うこと）に従わず、欧米型のオプション科目をそのまま導入するIB校の存在

→各校の学習内容（特にオプション）についての明確な指針（行政）

日本の文化を尊重しながらのDPの実施について（評価方法、オプションの設定や教授方法など）（コンソーシアムやDP）

③国内大学のIB入試

「IBスコアを活用した入試」であっても総合型選抜、推薦（公募）、共通テストも受験・・・など様々な形態

海外大学では絶対に要求されない（というよりしてはいけない）、EEやTOKなど最終成果物の提出を求められる

→海外大学と比べてIBを導入した入試の未整備感が強い

→文科省とIBのコミュニケーションと明確な指針

大学間の連携

大学・IB校の連携

ご清聴ありがとうございました。

課題意識の共有について

2021.06.22 遠藤 みゆき

(関西学院大学)

○IB 教員養成に係る課題

IB 教員養成で 1 番の課題は実習校の開拓である。同時に、継続可能な方法を考えると、現場の担当教員への負担と高校生にとっての授業の質の担保が気になっているのが現状である。

日本語で開講している IBDP 認定校がまだ限られているのに加え、日本のほとんどの IBDP 認定校はプログラムが始まって数年で、堅固たる体制やシステム、プログラムを構築しようと邁進されているのが現状であると思われる。そのような中に、経験のない学部実習生をお送りするからには、大学でできる限り模擬授業体験を提供し実習生の経験値を増やして送り出したいと思っているが、プロである指導教員との授業の質の違いは否めない。受け入れ校のほとんどの生徒は大学受験を控えていることに加え、担当教員にとっては DP の授業を受け持っているだけでも手一杯の感がある中、実習生を受け入れ時間をとって指導していただいた後、今度は実習生の授業で抜けていたところを実習後に補いながら進めていかなければならない。そのような状況を考えると、1 学期に複数の実習生を同じ学校に送り出すのは無理がある。つまり、複数の実習校が同じ時期に必要なわけであるが、日本語での DP 校が少ないという現実にも阻まれているのが現状である。

これらを打開するには、IB 教員養成の立場からは国内の IB 校のさらなる増加に力を入れていただくことを希望しているが、並行して受け入れ校や先生方の IB 実習生受け入れに対する声を丁寧に拾い、支援する仕組みを作れないだろうかと思っている。例えば、公式ワークショップとは別の研修会や情報共有といった、横のつながりを作ることである。これについては、IB 教員養成との関連がなくても、IB 校を訪問した際によく聞く現場からの声であるので、以下に別項目としても挙げさせていただく。また、実習生を継続して受け入れてくれる学校には、IB ワークショップの無料枠の提供など、文科省からのご支援をいただけないだろうか。

○ IB 校から大学に期待されること

1) IB 校同士の横のつながりについて

IB 校を訪問して 1 番耳にする要望は、IB 校同士の横のつながりである。小規模校で孤軍奮闘しているという状況や、先生方の実践に対する不安など理由は諸々であるが、情報や実践共有を切望されている学校がほとんどである。IB 教員養成プログラムを開講している大学が率先して、先生方の研修や情報共有の場を提供できないか、現在模索中である。

2) 大学のIB入試のあり方について

IB 入試等を導入しているほとんどの日本の大学では、基本的にフルディプロマの成績を求めており、科目受験の成績は考慮されていない。一方、海外の大学では、科目受験の成績を大学の合否判定の材料にしたり、要件を満たしていれば大学での単位置き換えが可能なところも多い。まずは、大学にIBディプロマプログラムについてのさらなる周知を図り、科目受験を含む柔軟な対応を強く推し進めていっていただけないだろうか。

課題意識の共有について

東京学芸大学附属国際中等教育学校長

荻野 勉

1. IB 教員の育成

IB 教育に携わる若手教員の育成の必要性を感じる。国公立私立を問わず、異動先として IB スクールという選択肢がないことが課題としてあげられることが多い。キャリアを通じて IB 教育に携わる教員としてのスキルアップが十分に果たせないことが心配される。本校としては、設置者の了解のもと、IB スクール間での人事交流する方策がないかを検討している。

2. IB 入試の活用状況

本校 DP 生の国内大学 IB 入試の活用状況は以下の通りである。

	在籍	IB 入試受験者	在籍者に占める割合
2020 年度卒業生	12 人	6 人	50%
2019 年度卒業生	11 人	5 人	45%
2018 年度卒業生	17 人	5 人	29%

本校としては入試の選択肢が広がったことは歓迎しているが、これから DP を採用しようとしている学校はこの数字をどう見るか。

3. プログラム評価とその改善

MYP としては 2 回目、DP としては初めてのプログラム評価をこの 2 年間に受けた。指摘事項を受け止め改善に努めているが、大幅な財政出動がなければ抜本的な改善が図れない指摘もあり、対応に苦慮している。国立大学は法人化以降、国からの運営交付金が細っており、設置者からの資金援助は期待できない。受益者負担とすると、DP 受講生徒負担金を大幅に上げざるをえず、本校のミッションと相いれない。

課題意識の共有について

2021.6.22 末吉 弘治

(静岡サレジオ幼小中高等学校 理事長学園長)

①学校が抱える諸課題について

PYPにおける学習指導要領とIBカリキュラムとの調整に関しては、特に困難を感じていない。なぜなら、カリキュラムマネジメントこそが、学校が取り組むべき授業づくりであり、探究学習の中に教科の指導内容を組み込む工程は、当然の授業準備であるからだ。問題として挙げるならば、次の2点だと感じている。一つ目は、教科書とIB学習を並立させ、両方ともに完璧に仕上げようとする。これは前述のカリキュラムマネジメントではなく、ダブルカリキュラムに他ならない。ただ、現状、教科書を用いての系統的な学習指導への信頼は、保護者からも児童からも教師からも根強いものがあるので、IB導入校にダブルカリキュラム的な傾向があるようにも感じる。二つ目は、評価システムについてである。形成的な評価が学習者にも保護者にも適時、フィードバックされるのが理想であるが、文面での伝え方では手間がかかることから、スピード感に欠け、タイムリーな評価からの学習改善につなげにくい。そこで、コンピュータ評価システムの導入が望まれるが、現実普及していない。これはIBに限定される訳ではないが、IB導入がコンピュータ評価システムの先駆けになれば、その関心と意義付けに拍車がかかると思われる。

②IBこそ一貫教育が望ましいのではないか。

私の学校では、幼稚園から小4まででPYP、小5から中2まででMYP、高2高3でDPを取得する。現在PYPが認定校、MYPとDPが候補校である。これは小中の段階で学び方の確立を、高校に至っては主体的な探究学習が生徒自身の発案によって自在に展開されうることを想定したものである。私学だからこそ可能なのかもしれないが、今後、公立校を含め、どうIB学習が継続性を持つようになるか、必要な議論だと思われる。

③ミッションステートメントについて

私の学校はカトリックミッションのヒューマニズムを前提としているが、公立校においてはどう捉えるべきか。学習者像の観点が人格形成そのものであるかどうか、価値観形成を含む話になると、人間性の教育について、今一步踏み込んだ議論が必要になると思う。

④哲学とTOKについて

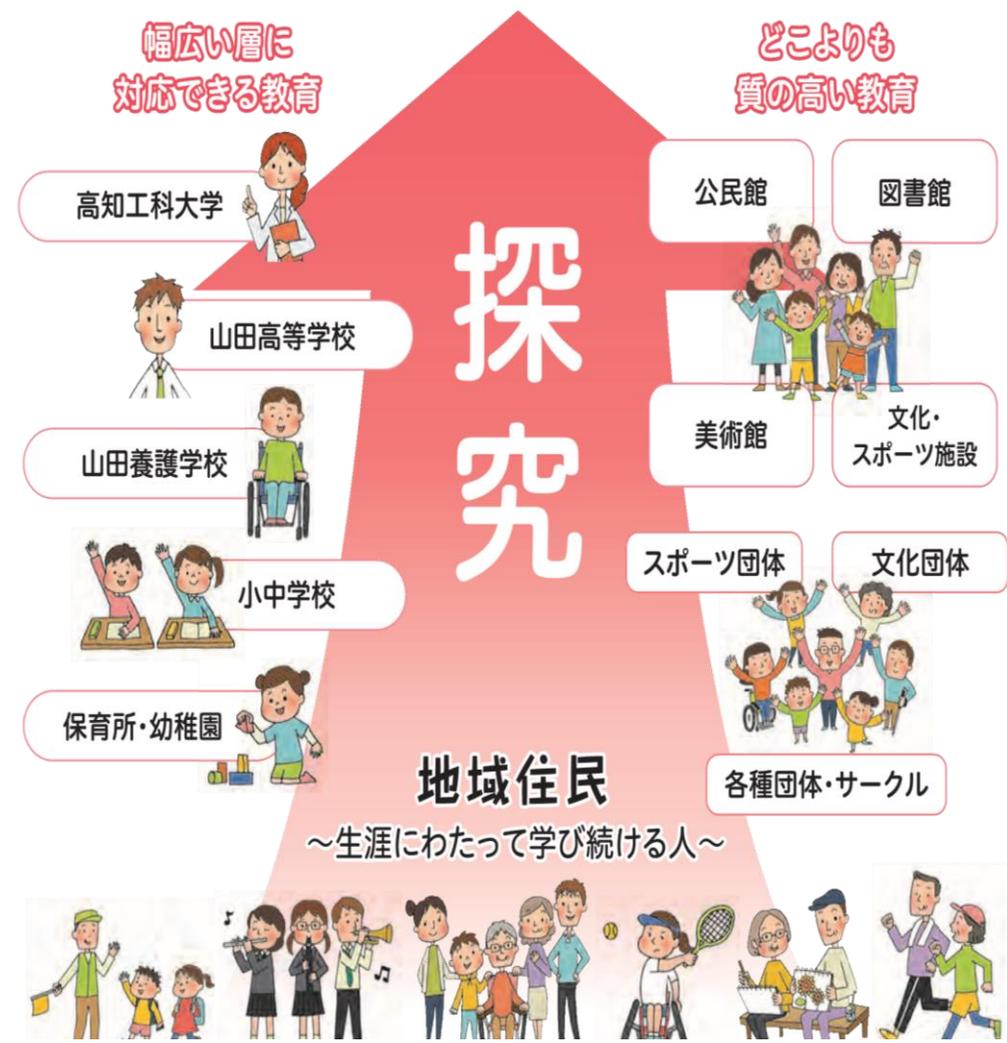
哲学にしても、TOKにしても日本では授業として馴染みが少ない。しかし、この二つこそがIBにおける学びのコアになる。PYPの中にも探究学習の前提になるものとして取り入れ方を考えたい。学習指導と生活指導の両全を目指し、人格形成につながる探究学習を模索する必要性を感じている。

課題意識の共有

高知県香美市教育委員会

香美市の教育

探究あふれる 学園都市 香美市

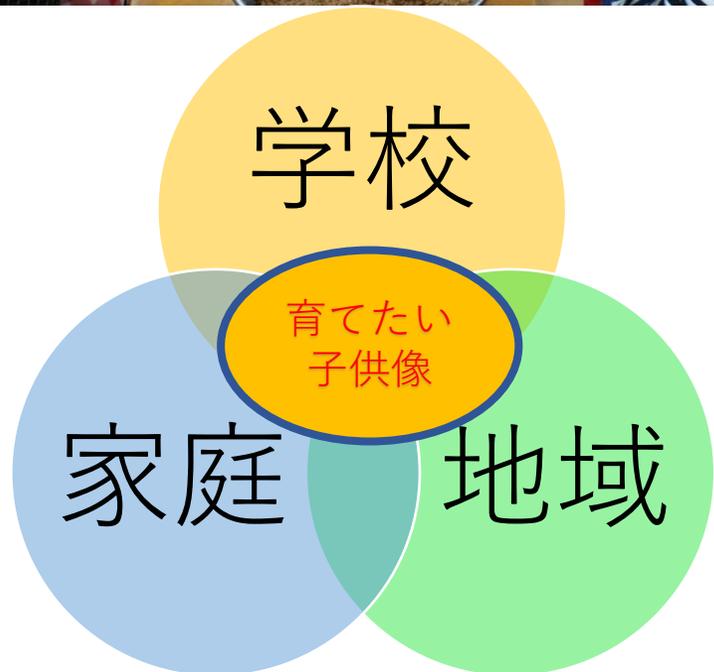


【香美市めざす人の姿】

- 主体的で**チャレンジ精神**を持つ人
- 様々なつながりで学び、**協働**できる人
- 学びから新しいものを生み出す**意欲を持ち行動する人
- 郷土に愛着**を持つ人



中山間の強味を 生かすIB教育



「人」「もの」「こと」 に関わる探究学習

①地域住民、保護者の理解

- 地域の学校なので学校を選べない
- IB教育を受けると、地域外へ出ていくのではないか
- 高校受検は大丈夫なのか
- 学力の個人差が生じるのではないか

②議会の理解

- 義務教育の機会均等は図られるか
- なぜ香北中学校区なのか
- 教員への過重負担とならないか
- 県教育委員会の理解や協力体制が必要なのではないか
- どのタイミングで事業実績・成果・事業検証していくのか

③財源の確保

④人事異動に伴う教員養成

⑤教員数の問題

課題解決に向けて

• 「香美市の町づくり」とその実現のための教育行政の在り方

• 市町村立学校の強味を生かすIB教育
→ 地域に開かれた学校教育
(地域住民が実感できるIB教育の良さ)

• 県教育委員会との連携強化

• 他市町村との連携

主催：IB保護者アンバサダーチーム

#しっちゅうバカロレア

香北中のごとバカロレアについて話そう
バカロレア体験・座談会

2021年
日時 Date & Place
6月4日(金) 19:00-20:30
場所 香美市基幹集落センター 2F大ホール
香美市香北町美良布1097(香北支所の西側)

申込不要

ゲスト Guest
香美市立香北中学校 IBコーディネーター 松尾周 先生

1 学習プログラムについて

バカロレアってなあに??

2 バカロレアプチ体験

みんなあて体験・共有しよう。

3 質問タイム

ようわからん、不安なことを松尾先生に聞いてみよう。

○この機会にぜひご参加ください!

香北町や香美市在住・在勤の方

- ・近所に子育て世帯のある方
- ・子育て中の方やお孫さんのおられる方
- ・香北町内に勤務されている方 など

★お子様連れも歓迎します!

こちらもあります

香北中学校主催 授業体験

6月24日(木) 19:00~

詳しくは中学校ホームページをご覧ください

お問い合わせ Mail: ib.ambassador781@gmail.com
QRコードからメールアドレスを転送いただけます

コンソーシアム 関係者協議会資料（課題意識の共有）

「日本国際バカロレア教育学会」の活動について

日本国際バカロレア教育学会 理事 原 和久（都留文科大学）

1. 国際バカロレア教育学会（Japan Association for Research into IB Education）とは

日本国際バカロレア教育学会は、国際バカロレア（IB）教育についての学術研究および実践研究の推進を図り、会員相互の交流と協力によって、IB 教育研究の発展に努めることを目的としている。2016 年度に設立され今年で 5 年目となる。具体的な活動内容は、下記の通り。

（1）IB の研究および調査

例）「IB の教育効果に関する調査研究」（IB コンソーシアム委託事業）

（2）研究発表のための年次大会の開催（年 1 回 9 月ごろ）

（3）学術誌「国際バカロレア教育研究」の編集、刊行（年 1 回）

（4）本会の目的を達成するために必要なその他の事業

2. 会員数

正会員 143 名、学生会員 59 名（2020 年度）

大学の研究者だけではなく、現職教員や IB 教員養成大学・大学院の学生なども含めた研究コミュニティの構築という意味で、本学会が果たしている役割は大きい。コロナ禍でもお互いの顔がみえるネットワークの構築にも寄与している。現職教員・研究者・学生などが IB 教育に興味を持ち、自主的に実践や研究に取り組むことで、IB 教育への理解が深まりボトムアップの取り組みが広まることが望ましいと考えている。

3. 学会誌「国際バカロレア教育研究」

投稿論文の区分は「研究論文」「実践事例研究」「研究ノート」の 3 種類。締め切りは毎年 1 月末。

今年で第 5 巻目の発行となるが、どの区分も次第に投稿数が増え論文の質も上がっている。今年度、J-STAGE にも登録を行った。IB は「探究」と「リサーチ」を重視したカリキュラムであるが、質の高い「研究」ができる教員も徐々に増えている。大学の研究者と学校教員の研究を通じた交流や学会活動は、日本の IB 教育の質の向上と今後の発展にもつながると思われる。

4. IB 教育研究の普及促進における諸課題について

以下、IB 学会の会員から聞かれた意見も反映させながら、個人的に課題と思うところを述べたい。

（尚、下記は日本国際バカロレア教育学会の公式見解ではなく、文責は原にあります。）

・IB 教育の学校への普及について

文科省によるカリキュラムの特例措置やコンソーシアム等関係者の尽力で、徐々に IB 教育が日本各地に浸透し、PYP、MYP、DP のすべてのレベルで導入が進んでいることは喜ばしいことである。しかし、特に高校 DP レベルでの実践においては、学習指導要領との整合性の問題、時間数や教授項目などカリキュラム要件の違い、IB の統一試験と日本の受験の両方を求められるケースなどから生徒の学習が過密ス

スケジュールとなり大きな負担となっている場合もあるようである。また、単なる進学コースの一つとして DP を行うのではなく、IB の理念や探究学習などの教育方法をどのように学校全体のものとしていくかが課題であると思われる。また、公立の IB 認定校においては、地域の拠点となる学校での先進的な実践をいかに周辺の学校に普及していくかも重要な課題であろう。日本の教育はそのままにいかにも IB を日本の学校に合わせるかが議論される傾向にあるように思われるが、日本の教育も世界の教育トレンドの中で変革していく必要があると思われる。学会としてもコンソーシアムと協力しながら、IB の日本での健全な発展と「主体的・対話的で深い学び」の実現に調査・研究を通して寄与していきたい。

・IB コンソーシアムと IB 教育学会の連携について

IB 機構が学問的な調査や研究を重視し、その観点から現場の教員や研究者を支援していることは有名だが、コンソーシアムにおいても IB 教育実践における調査・研究の重要性を認識していただき、学会の研究活動を支援していただくと、現場の先生方が IB 学会の催しなどに参加しやすくなるのではないかとと思われる。また、これまでも委託事業を請け負うなど、IB コンソーシアムとは協力関係にあるが、例えば共同で講演会や研修会を開くなどさらに連携を強化していくことで、社会における IB の認知度が高まるのではないかとと思われる。教員が主体的に調査・研究を行い自らの実践を改善していくことの大切さを共有していきたい。

・高校で DP を選択することのメリットについて

海外においては、IBDP を高得点で修了していると奨学金が受けやすくなったり、大学での基礎的な科目の単位を授業を履修することなく取得でき、その結果大学を早く卒業できる国もある。このような経済的なメリットも高校段階で生徒が IBDP コースを選択する一つの動機となっているようである。グローバル社会に対応する資質・能力の育成といった面だけでなく、アメリカの AP(Advanced Placement)のように、高校段階での IBDP 取得が大学での単位取得につながるなど、具体的に IBDP を履修するメリットが制度化されてくると、より DP 学習者が増えるのではないかとと思われる。

・海外の IB 教育との連携について

IB 教育と新学習指導要領の親和性が高いことはすでに色々なところで指摘されており、日本型 IB 教育の発展が期待されている。一方、日本の IB 教育が、日本以外の IB 教育実践とかけ離れたものとなってしまわないか心配する声もある。この点は、日本 IB 教育学会も同じであり、海外の研究者にも学会誌への投稿を呼びかけたり、より多様な会員構成になるように努力をしているところである。世界に目を向け学会員の国際志向性(International mindedness)を育成するような学術・教育活動をめざしたい。

・コロナウィルスの影響について

コロナウィルス感染拡大の影響により、なかなか IB ワークショップが開かれず困っているといった声が会員から聞かれる。特に、IB を導入しようとしている学校や、導入して間もない地方の学校にその傾向が強く、IB 教育の実践に不安を感じている教員も多くいるようである。その意味で、コンソーシアムの地域セミナーや各種の IB 関連イベントの実施、導入サポーターの存在は大変意義がある。また、IB ワークショップ参加への助成や IB 関連指導書等の日本語訳など、IB 教育を日本に根付かせるために、ぜひ今後も充実させていただきたいと考える。

以上。

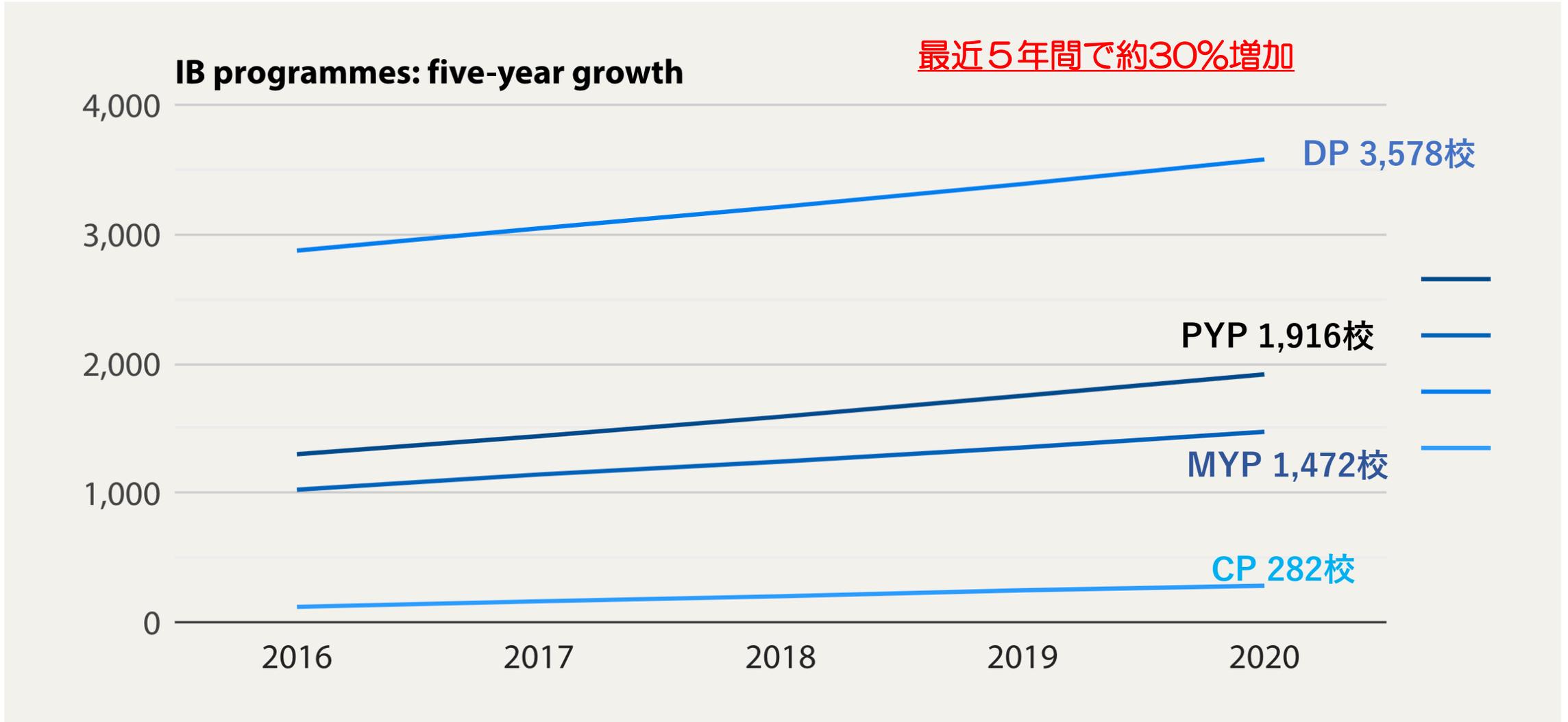
国際バカロレア
世界的な動向とIBOのビジョン
日本における普及のための課題提起（私見）

IB Heads Council member

アジア太平洋地区代表 渡辺寿之

（サニーサイドインターナショナルスクール）

2016年から2020年までの5年間の動向



DPのあり方についての全面的な見直しが始まっている

2019年	HCにて見直しの提案
2020-2022	調査フェーズ（世界のIBコミュニティからの意見集約）
2022-	実践調査研究フェーズ
2023-2029	段階的に導入

<改革の主な意図>

- ① **Programme design:** より高品質な教育を目指し、エビデンスに基づいたプログラムに
- ② **Student Choice:** 生徒達に更なる学びのオーナーシップを
- ③ **Enduring competencies:** 生涯にわたる知力・能力（生きる力）
- ④ **Common humanity:** より良い世界を作るという意識の向上
- ⑤ **Assessment:** 学びをより意味のあるものにするため評価方法を進化させる

日本におけるIB普及のための課題（私見）

- ① IBの理念・学校教育の目的の再認識（→ IBはSDGs時代の教育である）
- ② 全国自治体に向けたPRの強化
- ③ エキスパートの育成（→ IBに精通した窓口が足りていない）
- ④ IBOとの連携の強化（→ 世界最先端の情報を入手する）
- ⑤ 更なる予算の獲得（→ 社会的に認知をさらに上げる方法はないか）